

泣き虫ゼミ長

第12期 梶田 伸吾

正直に言おう。僕は泣き虫だ。小野ゼミでの活動の中で、僕は3度も泣いた。1度目。所属していた英論チームの論文が三田祭までに完成せず、その直後には韓国での学会発表が迫る中で、論文執筆を断念し、発表準備だけに集中せざるを得なかった時。チーム内での自分の無力さが、どうしようもなく悔しかった。2度目。後輩が出場するインカレディベート大会前日の本ゼミで、先生とゼミ生の間で意見の相違が生じる中で、ゼミ長として何もできなかった時。「繋ぐ」という、ゼミ長として最重要の仕事を全うできない自分に腹立たしさを感じ、帰り道で1人、道端に座り込み悔し涙を流した。そして、3度目。就職活動中、総合商社勤務の先輩社員の方へのOB訪問で大きな失敗を犯した僕のために、小野先生がその方へ送って下さった手紙を拝読した時。手紙には、僕が自己分析をする上で忘れていた数々のエピソードが、心のこもった温かい言葉で綴られていた。三田キャンパス前のラーメン屋で先生と2人、味噌ラーメンをすすりながら、バレないように必死に隠しながらも、僕の目は涙で一杯だった。一ゼミ生である僕のことを、これほどまでに温かく見守って下さる先生の優しさに心から感銘を受けた。

同期の皆へ。何もできない僕のことを、ゼミ長と呼んでくれて、そして支えてくれてありがとう。「幸福が現実となるのは、それを誰かと分かち合った時」。これは、映画「Into the Wild」の主人公 Christopher McCandless が、アラスカの広大な荒野をたった1人で旅し、自然の厳しさと想像を絶する孤独感に襲われながら死にゆく時に残した言葉である。僕は、この言葉に初めて出会った時、真っ先に第12期の皆のことを思い浮かべた。これまで、本当に色々なことがあった。嬉しいことも楽しいことも、苦しいこと悲しいことも。それにしても、本当に不思議だ。あんなに苦しかった思い出すら、今となってはまるで宝石みたいに輝いているのだから。

小野先生へ。先生は、「海外渡航のため入ゼミ試験を受けられない、でも小野ゼミには絶対に入りたい」と主張する、わがままでどうしようもなかった僕を、特別に拾って下さりました。そして、そんな落ちこぼれの僕に、ゼミ長という役職を与えて下さり、先生の一番近くで多くのことを学ばせて下さいました。先生、どうか約束させて下さい。何度もお話した「途上国の未来を変える」という夢を必ずや実現してみせます。先生に教えて頂いた「人の心を動かす誠意」という僕の強みを存分に発揮しながら、絶対に。これから、どんな国でどんなビジネスをするか、僕自身も全く見当が付きません。しかし、先生から教わったことは絶対に忘れません。

と、書きながらもまた泣いてしまった。小野ゼミの泣き虫ゼミ長とは、そう、僕のことだ。